

論文の内容の要旨

題 目 第一次世界大戦後ドイツにおける義勇軍経験の史的分析

氏 名 今井 宏昌

本論は、第一次世界大戦後のドイツで結成された志願兵部隊「義勇軍 [Freikorps]」の経験が、その後のドイツ史にとっていかなる意味をもつのかを、相異なる政治的道程を歩んだ3名の人物のバイオグラフィを軸に検討したものである。

序章では、第一次世界大戦の前線経験にナチズム・ホロコーストへの直接的な起点を見出すモッセの「野蛮化」テーゼと、それをめぐる歴史学上の議論を整理し、近年の研究において、議論の焦点が大戦中の前線経験大戦後の内戦・パラミリタリ（準軍隊）経験に議論の焦点が推移していることを確認した。そのうえで義勇軍の研究史を整理し、それが「ナチズムの前衛」という支配的な評価とは異なり、実際にはナチズムとは異なる方向性を有していたことを踏まえつつ、そこでの複数の経験の相互作用を明らかにするという課題を設定した。

第1章では、1918/19年のドイツ革命期における義勇軍運動の形成と展開を追った。義勇軍の設立は、第一次世界大戦末期からドイツ革命の勃発までのあいだ、「安寧と秩序」の回復と東部国境の守備という二つの問題を解決するために構想された。そして実際の組織化に際しては、旧軍将校や兵士評議会がイニシアティブを発揮した。

ドイツ国内の闘争において、義勇軍はたびたび左翼急進派や労働者に対する残忍な暴力を行使した。ただ、その暴力が成立間もないヴァイマル共和国の基盤固めに寄与したことは確かであり、ドイツ政府もそれを歓迎していた。他方、ドイツ東方の義勇軍は、ポーランドとの国境闘争やラトヴィアへの干渉戦争を展開していた。特に後者は、ボルシェヴィズムの西方への拡大を危惧する連合国とドイツ政府によって推進された国際事業であった。ただ、このドイツ東方での義勇軍運動は、第一次世界大戦後のヨーロッパの秩序形成と密接に関わっていただけに、国際情勢に翻弄される結果となり、その過程では共和国に叛逆する動きも見られたのであった。

第2章では、反共和国運動化した義勇軍運動の中で、ナチズムへと接近したアルベルト・レオ・シュラーゲターの義勇軍経験を扱った。西南ドイツの農民家庭に生まれ、敬虔で勤勉なカトリック青年として育ったシュラーゲターは、第一次世界大戦に従軍し、兄や学友を失う中で、次第に幼少の頃からの夢である聖職者への道を断念し、大戦後は見通しのきかない将来に不安を抱いていた。こうした中、彼は「解放」の大義名分を掲げ、高給と入植地を約束するバルト地域の義勇軍運動に身を投じ、その過程で、連合国に対して弱腰な共和国への不信と、義勇軍の蛮行を報じる国内の左翼への憎悪をはっきりと自覚するに至った。そして1920年3月には反政府クーデタ・カップ一揆に加わったのである。

とはいえ、バルト地域で生まれた共和国への不信と左翼への憎悪が、そのままカップ一揆に直結したわけでもない。そこでは、帝政期からの連続性を強く有する右翼結社がバルト地域から帰還した義勇軍戦士たちに接近し、第一次世界大戦の敗戦をめぐる「七首伝説」を援用する形で、彼らとの結合をはかっていた。こうした右翼結社による義勇軍戦士のオルグは、その後も1921年初夏のオーバーシュレージエン闘争で活発化した。そしてこの動きは、政府要人の暗殺へと帰結することになる。

シュラーゲター自身はこうした暗殺事件に直接関与することはなかったものの、1922年8月には、戦友たちとともにヒトラー率いるナチ党に接近し、11月には「ナチ党ベルリン支部」としての大ドイツ労働者党（GDAP）の結成に携わっている。これは官憲側の監視に晒されていた義勇軍出身の右翼アクティヴィストたちを政治的に再結集し、その人的ネットワークを維持するための組織であった。

第3章では、こうした義勇軍内の反共和主義的潮流と対峙したユリウス・レーバーの義勇軍経験を扱った。エルザス出身の社会民主党員であるレーバーは、バーデンの改良主義的潮流に刻印づけられながら、おそらくはその二重のマイノリティ性ゆえに「ドイツの子」たろうとし、第一次世界大戦に志願した。そして大戦を通じ軍人として上昇する傍ら、大戦後半に浮上した故郷エルザスの帰趨をめぐる議論を経てドイツ社会民主党（SPD）右派へと接近し、故郷を失った大戦後においては、SPD右派の主導する義勇軍の結成に寄与することになる。

カッパー揆が勃発すると、レーバーはこれを「反革命」と見なし、カップ派将校と鋭く対立した。ここでは、大戦前からの SPD 経験、そして勤務地ベルガルトにおける SPD 幹部との交流のほか、「ポーランド国境での警備活動に従事してきた」将校としての矜持が大きな役割を担っていた。だが、彼はカッパー揆の事後処理を装った共和派軍人排撃のやり玉にあげられ、結果的に軍を去らねばならなかった。

その後リュベックの政治家となったレーバーが主張したのは、第一次世界大戦の戦犯とともに、旧体制の残滓としての「カップの兄弟たち」を裁くことで、「ドイツの救済」が果たされるということであった。しかしながら、左翼政治家や政府要人への暗殺事件が続発し、司法の右翼暴力への寛容な態度が判明すると、レーバーのそうした期待は見事に裏切られることになる。そして彼は、カッパー揆のような「血まみれの闘争」が再来することへの危機感から、次第に労働者の直接行動による「共和国の防衛」を志向したのだった。

第4章では、義勇軍に身を置きながらも、 коммуニストとの共闘を果たしたヨーゼフ・ベッポ・レーマーの義勇軍経験を扱った。バイエルンの愛国的な教育者家庭で育ち、士官学校を経て将校となったレーマーは、戦場での負傷により故郷ミュンヘンへの帰還を余儀なくされ、そこで 1918 年秋の敗戦と革命に遭遇することになる。そして 1919 年 4 月にバイエルン・レーテ共和国が成立すると、オーバーラント義勇軍を組織し、レーテ共和国の打倒を遂行したのだった。

だが、1920 年 3 月のカッパー揆の結果、バイエルンが陰謀渦巻く「秩序細胞」へと変貌していく中であって、レーマーはその命を狙われる存在となる。その背景には、彼を中心とするオーバーラント義勇軍の古参メンバーが、反ヴェルサイユの旗の下に коммуニストに接近するというナショナル・ボルシェヴィスト的傾向を強めていったことが挙げられる。この点については、レーマーがバイエルンのドイツ共産党 (KPD) 議員と旧知の仲だったことも関係している。そして彼らは、1921 年初夏のオーバーシュレーゼン闘争を経て、実際に共闘関係を結んだのだった。

オーバーシュレーゼン闘争終結後、レーマーは、エアハルト旅団の元指導者ヘルマン・エアハルトの暗殺を教唆したかどで 1922 年 10 月に一時逮捕拘禁される。これは誤認逮捕であったが、少なくともレーマーはエアハルトの武断主義的かつ一揆主義的な政治が「^{ライヒ}国の一体性」にとって「有害」だとの批判を展開していた。その反面、オーバーシュレーゼン闘争において「^{ライヒ}国の一体性」のために共闘関係を結んだ коммуニストのグループに対して、レーマーは今や多大なる信頼を寄せていたのであった。

第5章では、第2章から第4章までで扱った3名の義勇軍経験が、義勇軍運動の天王山である 1923 年のルール闘争の中で交差する過程を追った。1923 年 1 月にルール地方がフランス=ベルギー連合軍に占領されたとき、ドイツでは政府公認の非暴力的な「消極的抵抗」と、左右のアクティヴィストによる暴力的な「積極抵抗」が展開された。

レーバーは第一次世界大戦への反省から、好戦的ナショナリズムの再来を危惧し、ルール占領に対して「国民的統一戦線」を唱える政府を厳しく批判した。これに対し、シュラーゲターとレーマーは「積極的抵抗」を展開したが、そうしたアクティヴィズムは、ルール闘争への不参加方針を掲げるヒトラーの政治主義と鋭く対立した。特にフランス軍に捕まったシュラーゲターは、処刑の直前、自身の第一次世界大戦と義勇軍運動を振り返りながら、「愛国者」意識を強く打ち出したのだった。

シュラーゲターの処刑後、ドイツ全土が反仏ナショナリズムに包まれる中で、右翼急進派による共和国批判は最高潮に達した。シュラーゲターは「国民の英雄」となり、共和派には「裏切り者」という誹謗中傷が寄せられた。レーバーはこれに対し、シュラーゲターがただの「冒険者」に過ぎないとし、改めて反共和派義勇軍への怒りを露わにした。そしてふたたび街頭の世界に繰り出した彼は、ついに共和派の自衛組織・共和国協会を結成するに至ったのである。

かくしてドイツ国内では、ルール占領による混乱とシュラーゲターの死を背景としながら、街頭のもつ政治的重要性が高まり、アクティヴィズムに拍車をかけた。こうした中でコミンテルンの理論家ラデックは、シュラーゲター崇拜を KPD への支持につなげようとした。そしてこの「シュラーゲター路線」には、レーマーらオーバーラント義勇軍出身のナショナル・ボルシェヴィストも組み込まれ、KPD と義勇軍運動とを仲介する重要な役割を果たしたのである。

終章では、以上の考察をまとめた。結論としては、①第一次世界大戦は義勇軍運動の要因ではなかったものの、大きな背景ではあったこと、②義勇軍経験は「政治の野蛮化」だけでなく、右翼暴力や一揆主義への対抗という反作用をももたらしたこと、③さらに義勇軍経験はナチズム運動の台頭に寄与しただけでなく、反ヒトラー・反ナチ抵抗運動の回路をも準備していたことを明らかにした。